

西アジア先史時代における貝製装身具—その起源から先土器新石器時代まで—

三宅 裕*

Shell beads in prehistoric southwestern Asia: From their origins to the Pre-Pottery Neolithic period

Yutaka MIYAKE

西アジアにおいて貝製装身具は中期旧石器時代から認められ、後期旧石器時代にはまとまった数が出土する遺跡がみられるようになるとともに、利用される貝の種類も増えていく。続旧石器時代は「ツノガイの時代」と言えるほど、ツノガイ類の利用が目立つようになり、ナトゥーフ期にそのピークを迎える。先土器新石器時代 A 期にはツノガイ類の割合がやや減少するものの、それ以前の状況が継続していると言えるが、先土器新石器時代 B 期になると大きな転換期を迎えることになる。ユーフラテス川中流域では紅海産のタカラガイ類が、南レヴァントでは海産二枚貝類が卓越するようになり、ツノガイ類の利用はほとんど認められなくなる。これは旧石器時代から継続されてきた貝利用の大幅な転換であり、大きな画期として捉えることができる。

キーワード：貝製装身具、旧石器時代、新石器時代、シンボリズム、社会の複雑化

The sporadic appearance of shell beads first occurred in the Middle Paleolithic in southwest Asia. In the following Upper Paleolithic, some cave sites yielded a substantial number of shell beads indicating an increase in the species exploited. *Tritia gibbosula* and *Columbella rustica* were commonly used as raw material. The Epipalaeolithic period could be called "the age of scaphopods", reaching its climax in the Natufian. Although the same exploitation pattern of shell beads generally continued into the Pre-Pottery Neolithic A, aspects of the shell beads showed significant change in the following Pre-Pottery Neolithic B. Cowries from the Red Sea were dominant in the Middle Euphrates and marine bivalves were common in the southern Levant, showing that this is one of the most significant changes in the shell beads assemblage.

Keywords: shell ornaments, Paleolithic, Neolithic, symbolism, social complexity

1. はじめに

ビーズなどの装身具によって身体を飾るという行為は、ホモ・サピエンスの高度な認知能力と深く関係しているとみなされ、赤色顔料の利用などとともに「現代人的行動」のひとつとして注目されてきた¹⁾ (McBrearty and Brooks 2000; 門脇 2013 など)。身体装飾は個人が自らのためにおこなう行為でありながら、同時に他者に対してもメッセージを発することになり、社会的な意味をもつ象徴行動であるとされる。

人類の象徴操作能力については、かつてはヨーロッパ後期旧石器時代の洞窟壁画や岩偶などの立体的造形物が代表的事例とされ、「多地域進化説」に基づいてネアンデルタール人からクロマニヨン人への進化の過程でそうした能力が獲得されたと考えられてきた。しかし、大きな論争を経て現生人類の「アフリカ単一起源説」が受け入れられるようになると、その故地であるアフリカにおいて象徴行動の痕跡が認められるかどうか注目が集まるようになる。ケニアのエンカプ

ネ・ヤ・ムト (Enkapune Ya Muto) 岩陰から出土したダチョウの卵殻製ビーズは、人類の認知能力が飛躍的に高まったことを示す証拠とされ、約5万年前に人類の神経系に大きな変化があったとする「意識のビッグバン説」が唱えられた (クライン・エドガー 2004)。その一方で、ホモ・サピエンスは種として誕生した時からすでに高度な認知能力を獲得していたとみる立場もあったが (McBrearty and Brooks 2000)、南アフリカのブロンボス (Blombos) 洞窟から線刻のある赤色顔料の塊や貝製ビーズが発見されたことで、象徴行動の発現が5万年前を大きく遡ることは確実となった。こうした発見を受けて、貝製ビーズには大きな注目が集まるようになり、かつておこなわれた発掘調査資料の見直しも進められたことで、北西アフリカや西アジアでも中期旧石器時代 (アフリカでは中期石器時代) にまで遡る貝製ビーズの存在が知られるようになった。

初期の装身具は専ら貝殻を素材としたものであり、

*筑波大学人文社会系

貝製ビーズは装身具の中でも最も長い歴史を有している。西アジアでは続旧石器時代後期になると骨製や石製の装身具も加わり、多様な装身具がみられるようになるが、その間も貝製装身具は素材として利用される貝の種類を増やし、あるいは変化させながら、主要な装身具であり続けた。こうした貝製装身具には一部淡水産の貝類も含まれているものの、中心となっていたのは海産貝類であり、その産地は基本的に地中海や紅海の沿岸部に限られる。しかし、時期による違いはあるものの、貝製装身具自体は内陸部の遺跡からも出土しており、資源獲得の方法、素材の選択や流通のあり方などの検討を通じて、その当時の社会の様相に迫ることができる。中には800 km近い距離を運ばれている事例もあり、長距離交易ネットワークとの関連でも注目される。さらに、貝製装身具が墓の副葬品として出土する場合もあり、副葬品の有無や多寡の検討を基に、社会の複雑性や階層化などについても議論されてきた。本稿では、比較的良好な資料の多いレヴァントやアナトリアの事例を中心に(図1)、中期旧石器時代から先土器新石器時代までの貝製装身具の様相を通時的に辿り、その変化や画期の把握を通じて、西アジアの先史時代社会を理解するための一助としたい。

2. 旧石器時代の貝製装身具

1) 中期旧石器時代

これまでに確認されている最古の装身具は、イスラエルのスフル(Skhul)洞窟B層から出土したムシロガイ科の*Tritia gibbosula*²⁾を素材とした貝製ビーズ2点であり、その年代は13.5-10万年前とされている(Grün et al. 2005)。1930年代に出版された発掘報告書には、4種の海産貝類が出土したことが記されているのみで、出土層位や点数についての詳しい記述はなかったが(Garrod and Bate 1937: 224)、最近になってロンドンの自然史博物館に収蔵されている資料の調査がおこなわれ、その中に貝製ビーズが含まれていることや、ビーズに付着していた土壌の分析によってB層から出土した可能性が高いことが示された(Vanhaeren et al. 2006)。

スフル洞窟のB層は、ホモ・サピエンスの人骨が10体出土していたこともあり、長らく後期旧石器時代に位置づけられてきたが、詳細な年代の検討がおこなわれると中期旧石器時代にまで遡ることが判明し(Mercier et al. 1993)、ミトコンドリアDNAの解析に端を発する現生人類の起源をめぐる論争の帰趨にも少なからず影響を及ぼすこととなった。こうした西アジアでも最古の部類に入る現生人類がすでに貝製ビーズを保有していたことは、「現代人的行動」との関連という面からもたいへん重要な意味をもつ。スフル

洞窟の貝製ビーズには殻口の反対側に孔が認められ、顕微鏡観察によって外側からの加撃の痕跡が確認されている(Vanhaeren et al. 2006: 1787)。これが人為的なものであるかどうかは不明であり、海岸に打ち上げられた貝殻の中から孔のある個体を採集した可能性も考えられる³⁾。

スフル洞窟と並んで古い時期のホモ・サピエンスの人骨が発見されたことで知られるカフゼー(Qafzeh)洞窟からも、貝製装身具が出土している(Bar-Yosef Mayer et al. 2009)。カフゼー洞窟からは子供も含む16個体の人骨が検出され、その年代は10-9万年前とされている(Schwarcz et al. 1988, Valladas et al. 1988)。貝製装身具は二枚貝であるタマキガイ科の*Glycymeris nummaria*を素材としたもので⁴⁾、多数の人骨が検出されたVII層よりもさらに下の層から10点出土している。そのうち殻頂部が残存している7点については、いずれも殻頂部端に孔が認められる。人為的な穿孔ではないとみられているが、孔の周囲には紐ずれの痕が認められることから、装身具として使用されたと考えられている。中には赤色顔料が付着している事例もあり、着色して装飾性を高める工夫もすでにおこなわれていた可能性がある。

アフリカ北西部においても中期石器時代にまで遡る貝製ビーズの事例が知られており、そこでもムシロガイ科の*T. gibbosula*とその類似種が素材として利用されていることは注目される。その分布は地中海西部のアルジェリアからモロッコの大西洋沿岸にまで及び、最古のものは11.5万年前にまで遡るが、8万年前を中心とするアテール(Aterian)期の例が多い(Vanhaeren et al. 2006; d'Errico et al. 2009; Steele et al. 2019)。海岸部の遺跡からだけでなく、40-60 km内陸に位置する遺跡からも出土しており、ウエド・ジェッバーナ(Oued Djebbana)遺跡⁵⁾に至っては約200 kmも内陸に位置している。これらの貝製ビーズの中には、火を受けて黒変しているものや赤色オーカーの痕跡が認められるものも含まれている(Bouzzouggar et al. 2007)。アフリカ北西部では30万年前にまで遡るような初期のホモ・サピエンスの人骨が発見されており(Hublin et al. 2017)、これらの貝製ビーズは人骨と相伴しているわけではないが、現生人類との関係を想定できる状況にある。

また、サハラ砂漠以南においても南アフリカを中心に中期石器時代にまで遡る貝製ビーズが知られている(Steele et al. 2019)。ブロンボス洞窟は線刻の入った赤色オーカー塊が出土したことで大きな注目を集めたが(Henshilwood et al. 2002)、*T. gibbosula*に形態的によく似ている同じムシロガイ科の*Nassarius kraussianus*製のビーズも68点出土している

(d'Errico et al. 2005, 2009)。この貝を素材としたビーズは、今のところブロンボス洞窟以外では確認されていないようであるが、アフリカ北西部と同様に赤色オーカーの痕跡の認められるものもある (d'Errico et al. 2009)。

西アジアにおいては、中期旧石器時代にまで遡る貝製装身具の事例は散発的ではあるものの、現状では現生人類との対応関係が認められる。*T. gibbosula* とその類似種がアフリカにおいても初期のビーズ素材として利用されていることは興味深く、そこには何らかの共通する選択基準が働いていたとみることができる。それが貝殻自体の形状や質感、あるいは色などにあったのかまではわからないが、いずれにしろこのムシロガイ科の貝はそれ以降も貝製装身具の中心的な素材として利用されていくことになる。

2) 後期旧石器時代

後期旧石器時代になると、ウチュアウズル (Üçağızlı) I 洞窟やクサル・アキル (Ksâr 'Akil) 洞窟のように、ある程度まとまった数の貝製ビーズが出土する遺跡がみられるようになる。ただし、そこで貝製ビーズとされているものの中には、実際に装身具

として利用されていたかどうか明確でないものも含まれている。というのも、初期の貝製ビーズは自然の作用で孔のあいた貝殻をそのまま利用している場合も多く、人為的な穿孔の有無を基準とはしにくいからである。したがって、食用とされた可能性のある貝や装身具には不向きな貝を除き、それ以外の貝種がいわば「潜在的な」装身具ということで集計されている。孔のあいていない個体も含まれることになるが、それらも意図的に遺跡に持ち込まれたものであることに違いはなく、何らかの形で利用しようとする意図があったとみなされる。また、こうした「完形の」貝殻も認められることは、遺跡において人為的に穿孔が施されることもあったことを示していると解釈することができる。

地中海北東岸に位置するウチュアウズル I 洞窟では、下層の I-F 層は後期旧石器時代初期 (Initial Upper Paleolithic) に比定されており、その最上層である F 層を除き、*T. gibbosula* が圧倒的多数 (85-95%) を占めている (Kuhn et al. 2001; Stiner et al. 2013)。ほかにはフトコロガイ科の *Columbella rustica* など、わずか数種の貝しかなく、貝種も限定的である。G 層では貝製ビーズがまとめて出土し

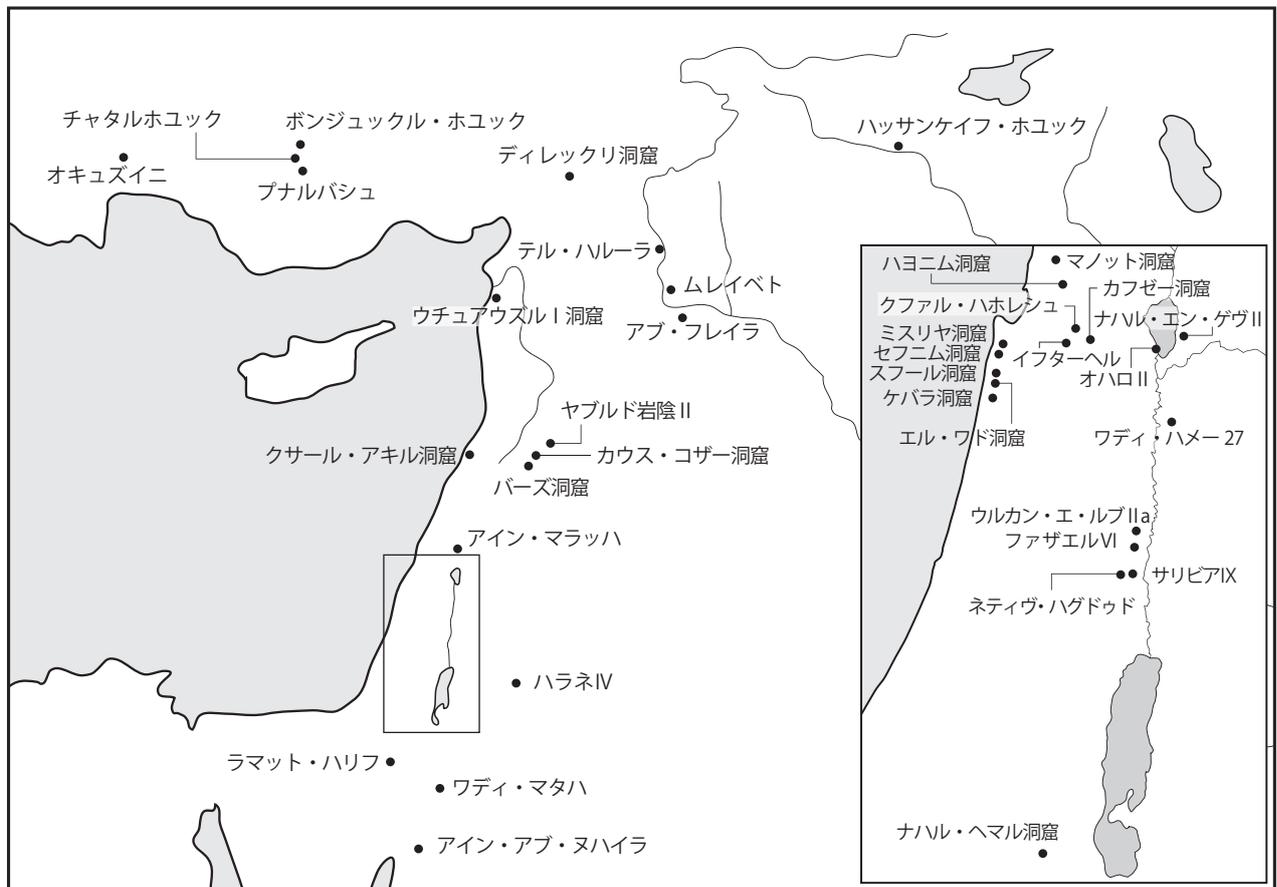


図1 本稿で言及した遺跡の分布図 (アフリカの遺跡を除く)

た3つの地点が確認されており、そのうち11点が密集して発見されたものは、1点を除き全てが *T. gibbosula* であった。そうした出土状況から、これらのビーズは紐で連ねられていたか、まとめて容器に納められていたと考えられている (Stiner et al. 2013: 392)。

F層になると *C. rustica* の割合が増加し (37%)、そうした状況はそれに続く時期の層 (E-C層)⁶⁾ からアフマル (Ahmarian) 期 (B1-3・B層) においても継続する。*T. gibbosula* も引き続き認められるが (23-55%)、*C. rustica* も一定の割合を占めるようになり (32-52%)、この2種を中心とした構成となる (合計75-88%)。また、装身具に利用される貝種も10種を超えるようになり、個体数としては多くはないものの、多様性がみられるようになる。特に、アマオブネガイ科に属する淡水産小型巻貝である *Theodoxus jordani* が出土していることは注目され、内陸の河川から採集された可能性のほかに、オロンテス川によって地中海に運ばれ、海岸に打ち上げられた貝が採集された可能性も指摘されている (Stiner et al. 2013: 394)。

現在の地中海の海岸線から3kmほど内陸に位置するクサル・アキル洞窟でも、1930年代と1940年代に実施された発掘調査において貝製ビーズの良好な資料が確認され、最近になって詳細な分析がおこなわれた (Bosch et al. 2015)。後期旧石器時代初期の層では *T. gibbosula* が多数を占め (59%)、*Glycymeris* sp. (21%) と *C. rustica* (9%) がそれに続く。その上層のアフマル期でも、*T. gibbosula* (33%)、*C. rustica* (25%)、*Glycymeris* sp. (25%) の3種の貝で80%以上を占める状況が継続している。クサル・アキル洞窟では二枚貝の *Glycymeris* sp. が多くみられることが特徴であるが、後期旧石器時代初期には *T. gibbosula* が多数を占め、アフマル期になると *C. rustica* の割合が増えるというおおまかな傾向は、ウチュアウズルI洞窟とも共通していると評価できる。

クサル・アキル洞窟では、アフマル期に後続する後期旧石器時代の層も確認されており、そこでは *T. gibbosula* (43%)、*C. rustica* (32%)、*Glycymeris* sp. (7%) に加え、新たに地中海産のツノガイ類 (*Antalis* sp.: 6%) もみられるようになる。ツノガイ類はケバラ (Kebara) 洞窟やマノット (Manot) 洞窟でも、レヴァント・オーリニャック (Levantine Aurignacian) 期の遺物を含む層から出土しており (Bar-Yosef Mayer 2019)、ほかにもハヨニム (Hayonim) 洞窟⁷⁾、ヤブルド (Yabrud) 岩陰II、セフニム (Sefunim) 洞窟の同期の層から出土している (Belfer-Cohen and Bar-Yosef 1981;

Reese 1991: 613; Shimelmitz et al. 2018)。特に、セフニム洞窟では *C. rustica* が63%と多数を占めているが、ツノガイ類も22%の割合でそれに次ぐ存在となっている。*T. gibbosula* は2%、*Glycymeris* sp. は2点しか出土していない。

後期旧石器時代の貝製装身具は、中期旧石器時代に利用されていた *T. gibbosula* と *Glycymeris* sp. が引き続き素材とされ、そこに *C. rustica* が加わるという構成となっている。*Glycymeris* sp. はレバノンのクサル・アキル洞窟で多く認められ、地域差も存在していたとみられる。レヴァント・オーリニャック期にはツノガイ類も出土するようになり、利用される貝種も多様になっていく。すでに後期旧石器時代初期の段階で、海産貝類が内陸部の遺跡から出土するような事例もみられるが (Kadowaki et al. 2019)、レヴァント・オーリニャック期には地中海沿岸部に位置するケバラ洞窟からヨルダン渓谷産とみられる *Theodoxus* sp. などの淡水産貝類や紅海産の貝類が出土するなど、資源獲得活動がかなり広域に及んでいた可能性や交換等によって貝がある程度の範囲に流通していた可能性があるとして指摘されている (Bar-Yosef Mayer 2019)。

3. 続旧石器時代の貝製装身具

1) ツノガイ類

続旧石器時代の貝製装身具の特徴としては、後期旧石器時代後葉に始まったツノガイ類の利用がさらに盛行することがあげられる。ツノガイ類はその名の通り全体が細い「角状」を呈しており、上下両端に後口と殻口と呼ばれる孔がある。紐を通すには好都合であるが、上端の後口は径が小さいこともあり、装身具として利用する際には、端部を切断するなどの加工が施されることが一般的である。地中海にも紅海にも生息しており、一般に地中海産のツノガイ類は *Antalis* sp. に、紅海産のものは *Dentalium* sp. に分類され、それぞれに複数の種が認められる。実際に続旧石器時代に利用されていたツノガイ類としては7種が知られており、縦肋が明瞭で断面が多角形を呈するものもあれば、貝殻の表面が平滑で断面が円形を呈するものもある。また、一般に紅海産のツノガイ類の方が大型であることも指摘されている (Kurzawska et al. 2013)。

したがって、ツノガイ類の利用の実態、あるいは資源獲得のあり方を把握するためには、正確な種の同定が求められることになる。しかし、ビーズなどに加工されている場合には必ずしも種レベルまでの同定が可能であるとは限らず、また報告によってはそこまで意識した同定がおこなわれていないケースも少なく

い。さらに、状況を複雑にしている要因として、中新世や鮮新世などの地層からツノガイ類が産出することがあり、こうした「化石貝」も利用されていることがある。地中海東部沿岸では、トルコ、シリア、キプロス、レバノンなどでツノガイ類を採取できる地層の存在が確認されており、特にトルコのサマnderー周辺は先史時代に利用された化石貝の産地として有力視されている (Bar-Yosef Mayer 2010; Kurzawska et al. 2013; Stiner et al. 2013)。

また、南レヴァントの遺跡から出土しているツノガイ類は、必ずしも現生のものと同一であるとは言えないとの指摘もある (Kurzawska et al. 2013: 614–616)。全体に現生のツノガイ類よりも厚手で大型である傾向が認められ、中には縦肋の数が異なっているものも含まれているため、鮮新世に遡る「化石貝」である可能性もあるものの、南レヴァントではツノガイ類を産出する良好な地層の存在が確認されていないことから、最終氷期からの海水準変動の作用で、古い時代のツノガイ類を海岸で採集できるような状況にあったのではないかと想定されている。

2) 続旧石器時代前期・中期

続旧石器時代前期の貝製装身具としては、ガリラヤ湖畔に位置するオハロ (Ohalo) II 遺跡から 150 点以上が確認されており、ツノガイ類 (136 点) と *C. rustica* (4 点) の出土が報告されている (Bar-Yosef Mayer 2002)。ツノガイ類については紅海産の可能性もあるものも数点含まれているとのことであるが、基本的には地中海産であり、長さ 1–2 mm 程度に短く輪切り状に分割されている⁸⁾。ヨルダン渓谷西部のウルカン・エ・ルブ (Urkan-E-Rub) IIa 遺跡では 254 点の海産貝類が出土し、フトコロガイ科の *Mitrella scripta* (40.55%)、とツノガイ類 (40.51%) を中心に、それに *C. rustica* (15.35%) が加わるという構成となっている (Hovers et al. 1988)。ウチュアウズル I 洞窟の最上層はケバラ期に比定されており、そこではニシキウズ科の小型巻貝である *Gibbula* sp. が最も多く (24%)、*C. rustica* と *T. gibbosula* がともに 22% でこれに次ぎ、ツノガイ類も 20% を占めている。ただし、これらのツノガイ類は海岸で採集されたのではなく、遺跡付近に産出する化石貝を利用したものと考えられている (Stiner et al. 2013: 387)。

ヨルダン部に位置するハラネ (Kharaneh) IV 遺跡では、続旧石器時代前期においては *M. scripta* が最も多く (35.54%)、これに *C. rustica* (19.42%)、地中海産のイモガイ類 (17.77%)、ツノガイ類 (10.33%) が続く (Richter et al. 2011: Table 4)。地中海産の貝類が中心となっているにもかかわらず、*T.*

gibbosula は出土していない。また、数は多くないもののアマオブネガイ科の *Nerita sanguinolenta* やタカラガイ類の *Erosaria nebrates*⁹⁾ など紅海産の貝も出土している。後続する続旧石器時代中期になると、*N. sanguinolenta* は 17.53% を占めるまでになり、ツノガイ類 (52.59%)、*M. scripta* (18.28%) に次ぐ割合となっている。この時期にはツノガイ類が半数以上を占めるまでになっているが、それとは対照的に *C. rustica* (2.02%) は大きく減少している。ハラネ IV 遺跡は高さ 2 m ほどではあるがテル状を呈しており、その規模も 2.1 ha とこの時期の遺跡としては大きいことなどから、多くの集団が集集し活動する拠点的な場であったと考えられており (Maher et al. 2016)、紅海産の貝類が比較的多いこともこうした遺跡の性格と関連している可能性がある。ヨルダン南部ペトラ近郊に位置するワディ・マタハ (Wadi Mataha) 遺跡では、続旧石器時代中期のジオメトリック・ケバラ期においてツノガイ類が 60% を占めており、後続するナトゥーフ前期 (70%)、後期 (63%) でもそうした傾向は続いている (Janetski 2005)。

3) 続旧石器時代後期 (南レヴァント)

「ナトゥーフ文化」の核地域とされる南レヴァントでは、この時期になると貝製装身具に占めるツノガイ類の割合がさらに高くなり、ほとんどの遺跡で圧倒的な割合を占めるようになる。D. S. リース (Reese) の集計によれば、ナトゥーフ期の遺跡におけるツノガイ類の割合は、最も低いファザエル (Fazael) VI 遺跡でも 63.3% であり、そのほかの遺跡では軒並み 70–90% 台となっている (Reese 1991: Table 1)。また、別のデータにおいても、出土点数が 50 点を下回る遺跡でこそ 50% 台の事例があるものの、ある程度の数が出土している遺跡では 68–89% となっている (Bar-Yosef Mayer 2010: Table 1)。さらに、ツノガイ類の種同定がおこなわれているデータを見ると、地中海沿岸やヨルダン渓谷に位置する遺跡では、地中海産のツノガイ類が多数を占め、そこに紅海産のツノガイ類が少数混じる遺跡もみられるという状況にある (Kurzawska et al. 2013: Table 1)。基本的には距離的に近い海岸から貝殻を調達していたと考えられ、紅海産のツノガイ類が卓越しているのはネゲヴ砂漠に位置するラマツト・ハリフ (Ramat Harif) 遺跡が知られるのみである。

ナトゥーフ期の貝製装身具の特徴は、ツノガイ類が群を抜いて多いことに加え、墓の副葬品としても出土する例がみられるようになることである。先行する続旧石器時代前期・中期には、定住化の動きと連動して集落から検出される埋葬の事例が増え、その中には副

葬品を伴うとされているものもある。しかし、その多くは打製石器、製粉具や石製容器の破片、動物骨・角などであり、貝製装身具が副葬されている事例はない (Maher et al. 2012)。それが、ナトゥーフ期になると埋葬の検出数が大幅に増加するとともに、貝製装身具を中心に豊富な副葬品を伴う事例も知られるようになる。

エル・ワド (El-Wad) 洞窟では、洞窟手前のテラス部から 31 体の人骨が検出され、そのうちの 5 体は豊富な装身具を伴っていた (Garrod 1936/1937; Garrod and Bates 1937)。ひとつの墓から複数個体の人骨がまとまって出土している例が多いが、その中の 1 体だけが装身具を伴っていることが特徴である。また、これらの埋葬はお互いに近接した位置にあり、洞窟の入口側には弧状にめぐる石列も検出されていることから、そうした遺構に伴う埋葬であった可能性も指摘されている (Goring-Morris 1995)。

23 号人骨 (成人男性) は別個体の成人と子供の人骨とともに出土し、ツノガイ製ビーズの頭飾り、骨製ビーズとツノガイ製ビーズからなる頸飾り、右脚には 8 段のツノガイ製ビーズから構成される带状飾りを装着していた。頭飾りは側頭部から前頭部にかけて、左右両側から扇状に広がるように 3 列のツノガイ製ビーズが配されており、後頭部付近からもビーズが出土していることから、頭部全体を大きく覆うようなものであった可能性がある。41 号人骨 (成人男性?) では頭頂部を中心にツノガイ製ビーズが検出され、鳥骨製装身具も共伴していることから、両者を組み合わせた頭飾りを装着していたと考えられる。右上腕骨と右大腿骨周辺からもツノガイ製ビーズがまとまって出土しており、ほかにも装身具を身に纏っていた可能性がある。25 号人骨 (成人男性) はツノガイ製ビーズ 7 段からなる带状の頭飾りを装着した状態で検出され、57 号墓から出土した 7 体の人骨のうちの 1 体は、ツノガイ製ビーズからなる頭飾りと骨製ビーズの頸飾りを伴っていた。5 体の人骨が検出された 28 号墓では、子供の頭骨の周辺からガゼルの指骨製装身具が出土している (Belfer-Cohen 1995)。これらの埋葬に伴うビーズの総数は不明であるものの、ツノガイ製ビーズが副葬品の中で、中心的役割を果たしていたことは明らかである。

ハヨニム洞窟のナトゥーフ期の層からは、15 基の墓から計 48 体の人骨が検出され、そのうちの 4 体は豊富な副葬品を伴っていた。Ⅲ号墓の 33 号人骨 (成人男性) では頸部付近からツノガイ製ビーズが 365 点、Ⅷ / Ⅸ号墓の 17 号人骨 (成人男性) では腕の付近からツノガイ製ビーズが 155 点、Ⅶ号墓の 9 号人骨 (成人女性) では骨製装身具とともにツノガイ製ビーズが 182 点出土している (Belfer-Cohen 1995)。17

号人骨と同じ墓から出土した 25 号人骨 (成人男性) では、片方の腕の付近から鳥骨製装身具が 20 点検出された。ツノガイ類の種同定の結果によると、上記のビーズのほとんどが縦肋の目立たない *Antalis vulgaris* であった (Kurzawska et al. 2013: Table 2)。遺跡全体では、縦肋が顕著な *Antalis dentalis* も約 34% を占めているにもかかわらず、上記の副葬品の中には僅か 2 点しか認められないことから、装身具の製作に際しては採集した貝をそのまま利用するのではなく、貝種を揃えようとする意識が強く働いていたと考えられる。

このほか、ヨルダン渓谷西部に位置するアイン・マラッハ (Ain Mallaha) 遺跡からも、1 号建物に伴う墓域 A の埋葬のうちの 4 基と 131/51 号建物に伴う墓域 B の 5 基の埋葬に、ツノガイ類ビーズを中心とする副葬品が認められ (Belfer-Cohen 1995)、ヨルダン渓谷東部に位置するワディ・ハマー (Wadi Hammeh) 27 遺跡でも 3 号人骨の下顎付近からツノガイ製ビーズが 27 点出土している (Edwards et al. 2013: 283)。

このように、ナトゥーフ期には豊富な副葬品を伴う埋葬が確認されているが、その数は 5 遺跡からの 25 基ほどで、400 体以上検出されている埋葬全体の約 6% にすぎない¹⁰⁾ (Belfer-Cohen 1995)。また、こうした事例はほぼナトゥーフ前期に限定され、ナトゥーフ後期には良好な事例は確認されていない。これについては、ヤンガー・ドリラス期の再寒冷化によってナトゥーフ後期に再び移動性が高まることと関係していると解釈されることが多い (Belfer-Cohen 1995 など)。ナトゥーフ前期に限定されるとはいえ、副葬品のあり方に大きな偏りがみられ、子供の厚葬と評価できるような事例もあることに注目して、ナトゥーフ期の社会はある程度階層化の進んだ社会であったとする見解が提出され (Wright 1978)、さらに一步踏み込んで「首長制社会」に相当するとの評価がなされたこともあった (Henry 1989)。その一方で、ツノガイ類は容易に獲得できる資源であり、ビーズの製作にもさほどの労力を要するものではないとして、ナトゥーフ期の遺跡から数多く出土するツノガイ製ビーズは、象徴的な意味を有する特別な器物ではなかったとする意見もある (Belfer-Cohen 1995: 15; Byrd and Monahan 1995)。しかし、これは「階層化社会」、「首長制社会」という評価に対しての反駁という意味合いが強く、やはり一部の限られた埋葬に豊富な副葬品が認められるという事実は、そう簡単には無視することではないと考える。近年では、ナトゥーフ期の社会をめぐる議論も落ち着きを取り戻し、社会の複雑化が認められるとする評価が定着しつつあるように見受けられる (Bar-Yosef 2002; Shaham and Belfer-

Cohen 2017)。

大量のツノガイ類の存在によって陰に隠れてしまいがちであるが、ナトゥーフ期の遺跡からはそれ以外の貝製ビーズも出土している (Bar-Yosef Mayer 2010)。利用されている貝種は 20 種以上に及ぶが、その中で目立つのは *C. rustica*、*T. gibbosula*、*Glycymeris* sp.、*Theodoxus* sp. である。これらはいずれも旧石器時代から利用されてきたものであり、相対的な割合は低いとはいえ、その伝統が途絶えてしまったわけではない。これらの貝種の利用を継続させつつも、ツノガイ類に大きく傾斜しているというのが、ナトゥーフ期の貝製装身具の姿であると言える。また、これらの貝製ビーズが副葬品としては出土していないことは、ツノガイ類製のビーズが特別な象徴的意味をもつものであったことを補強する材料になると思われる。

ナトゥーフ期の貝製装身具についてももうひとつ特筆すべきこととして、「白玉」(disc beads) が出現することがあげられる。素材となった貝種を特定するのは困難な場合も多いが、二枚貝を素材として貝殻を分割し、平板なビーズに加工されている。素材となった貝殻の形状に規定されない、新しいタイプのビーズの出現という点で注目される。こうした貝製白玉は、ワディ・マタハ遺跡ではナトゥーフ前期の層から出土しているが、顕著になるのはナトゥーフ後期からである (Janetski 2005)。アイン・マラッハ遺跡やナハル・エン・ゲヴ (Nahal Ein Gev) II 遺跡においても、ナトゥーフ後期の層から出土している (Bar-Yosef Mayer 2005: 180; Grosman et al. 2016)。ナトゥーフ期には石製ビーズも製作されるようになることから、その影響を受けて成立した可能性も考えられるが、これについてはなお検討が必要である。

4) 続旧石器時代後期 (南レヴァント以外)

シリア南部、ダマスカス近郊のバーズ (Baaz) 洞窟とカウス・コザー (Kaus Kozah) 洞窟の上層は、後世の遺物の混入が多少みられるものの、ナトゥーフ後期に比定されている (Kandel et al. 2018)。両遺跡から出土した貝製ビーズの組成は比較的良く似ており、*C. rustica* (44%、25%) とツノガイ類 (23%、26%) が多く、ほかに *T. gibbosula* (19%、15%) と *Theodoxus* sp. (7%、21%) が主な貝種となっている。南レヴァントのナトゥーフ期の遺跡と比べると、ツノガイ類の割合がさほど高くないことが特徴であると言え、相対的に *C. rustica* や *T. gibbosula* の割合が高くなっている。

同様の状況は、ユーフラテス川中流域でも認められる。アブ・フレイラ (Abu Hureyra) 遺跡の I 期はナトゥーフ後期に比定され、185 点の貝製装身具が出

土している (Ridout-Sharpe 2015: Table 2)。海産貝類としては、*T. gibbosula* (75%)、地中海産のツノガイ類 (5%)、*C. rustica* (1 点) の 3 種のみで、ほかに淡水産小型巻貝類¹¹⁾ も出土している。*T. gibbosula* が多数を占め、ツノガイ類の割合は南シリアよりもさらに低くなっている。ちなみに、ムレイベト (Mureybet) 遺跡の IA 期では貝製の白玉以外海産貝類は出土しておらず (Maréchal and Alarashi 2008)、残念ながら状況はよくわからない。

これらの遺跡の状況を見ると、ツノガイ類の割合が極端に高いのは南レヴァントだけの現象のようにもみえるが、さらに北方のアナトリアの資料にも目を向けると、状況はそう単純ではないことが理解される。コンヤ平原に位置するプナルバシュ (Pınarbaşı) 遺跡では、188 点出土した貝製ビーズのほとんどが、ツノガイ類 (81%) と *T. gibbosula* (18%) の 2 種によって占められている (Baysal 2013a)。ツノガイ類の割合の高さは南レヴァントのナトゥーフ期の遺跡にも匹敵するものであるが、14 号墓 (成人男性) から 140 点まとまって出土していることが大きく、それ以外のコンテキストではむしろ *T. gibbosula* の方が多い。貝製装身具が副葬されていることも共通する点であるが、プナルバシュ遺跡ではカメの甲羅を利用した容器の中に納められており、被葬者に装着されていたわけではない。ナトゥーフ期の遺跡との関係が想定されているが、ツノガイ類の割合の高さをどこまで額面通り受け取ってよいものか慎重にならざるを得ない面もある。アンタルヤ近郊のオキュズイニ (Öküzini) 洞窟からは、*C. rustica* が 42 点、*T. gibbosula* が 28 点、ツノガイ類が 9 点出土しており、ツノガイ類の割合が高いわけではない (Albrecht et al. 1992)。

東アナトリアに位置するディレックリ (Direkli) 洞窟からは、海産貝類が 166 点出土しており、*T. gibbosula* (51%) が最も多く、これにツノガイ類 (46%) と *C. rustica* (4%) が加わる構成となっている (Baysal 2016)。ツノガイ類が比較的多いと言え、地中海産の種 *Antalis dentalis* が中心となっている。長めのものが多いが、幅 1 mm 以下に短く切断されたものもみられる。このほか淡水産の *Theodoxus* sp. も出土しているが、穿孔されている個体は確認されていない。確認されている最も近い生息地はオロンテス川流域 (Amr and Abu Baker 2004: 221) となるが、ディレックリ洞窟に近い川などに生息していた可能性もある。

4. 先土器新石器時代の貝製装身具

1) ハッサンケイフ・ホユック遺跡

ハッサンケイフ・ホユック (Hasankeyf Höyük)

はティグリス川上流域に位置する先土器新石器時代初期の集落遺跡で、円形の半地下式遺構を中心とする第1期（下層）と方形の半地下式遺構からなる第2期（上層）の2つの時期が確認されている（三宅2020）。本遺跡からは主に墓の副葬品として貝製ビーズが出土し、貝種としては *T. gibbosula*、イモガイ類 (*Conus* sp.)、種未同定の小型巻貝と淡水産小型巻貝の *Theodoxus* sp. の4種が確認されている。イモガイ類は2点、種未同定の巻貝は1点しか出土していないため、実質的には *T. gibbosula* と *Theodoxus* sp. の2種から構成されていると言うこともできる。ほぼ同時期のレヴァントやアナトリアの遺跡では、これらに加えツノガイ類や *C. rustica* などが出土することも多いが (Maréchal and Alarashi 2008; Baysal 2013b)、これらの貝種は確認されていない。

T. gibbosula は310点出土しており、特に250号墓から250点、211号墓から52点がまとまって検出されている (図2)。この2基の墓以外では、数点出土している例があるだけであり、墓によって大きな偏りが認められる。250号墓では被葬者の腰の付近から紐で連ねられたような状態で検出され (48点と13点)、ベルトあるいは腰飾りを構成していたと考えられる (図3)。*T. gibbosula* 製のビーズは、その偏平な形状や摩耗状態の観察を基に、布などに縫い付けて使用された可能性が指摘されているが (Ridout-Sharpe 2015: 105)、この事例は連として連ねて使用されることもあったことを示している。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土の *T. gibbosula* 製ビーズは、体層背面は大きく除去されており、貝殻内部の軸柱部が露出して見えているものも多い。一般に、新石器時代以前のは孔が小さく、新石器時代になると穿孔部が拡大する傾向にあることが指摘されているが (Baysal 2013a)、それとよく符合している。ビーズ表面に赤褐色顔料の痕跡が認められる例も少なからずあり、火を受けて黒変している例も1点ではあるが確認されている。こうした *T. gibbosula* 製ビーズはすべて第1期の墓から出土したものであり、第2期になると姿を消してしまう。もうひとつの海産貝類であるイモガイ類は2点確認されているが、いずれも殻頂部が除去されており、うち1点には赤色系顔料の痕跡が明瞭に認められる (図4)。

Theodoxus sp. は殻長が7mm前後の小型の淡水産巻貝であり、殻口の反対側の背面に石で磨ってあけたとみられる孔が認められる。このビーズも第1期に帰属する墓である50号墓から2224点、250号墓から1648点、315号墓から622点と、まとまって出土している事例がある。50号墓ではクロライト製の石製容器の近くに集中していたことから、容器の中に納めるような形で副葬されていた可能性がある (図5)。こ

の墓からは *T. gibbosula* 製のビーズも2点出土しており、上述したように250号墓でも多数の *T. gibbosula* 製のビーズが伴っていた。この2基の墓からはいずれもクロライト製の石製容器が出土しており、副葬品の構成にかかわる何らかの規定があったことを窺わせる。また、315号墓の被葬者は子供であったが、多数のビーズが副葬されていたことは、子供の厚葬という観点からも注目される事例である (図6)。

Theodoxus sp. は淡水産巻貝であるため、ティグリス川など遺跡周辺から採集された可能性も考えられるが、ティグリス川上流域に生息しているとの情報は確認できていない。ユーフラテス川流域 (*Theodoxus euphraticus*) やヨルダン溪谷 (*Theodoxus jordani*) では、その類縁種の生息が知られていることから (Amr et al. 2014)、そうした地域から将来された可能性も考えられる。ただし、この種の貝は環境の変動に弱く、今では絶滅が危惧されるまでになっているとのことで、単純に現在の分布状況から過去の生息域を推測するのは難しい状況にある。ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、孔のあいていない完形の個体が確認されていないことやレヴァントでは旧石器時代からビーズの素材として利用されてきたことを考えると、現時点では交易ネットワークを通じて製品として入手された可能性がより高いとしておきたい。

Theodoxus sp. は2つの時期を通じて認められるが、第2期になるとその数は減少する。石製ビーズと共に出土することが多くなり、まとまって出土する数もあまり多くなることから (最多でも48点)、単独で使用されていたというよりは、石製ビーズと組み合わせる装身具を構成していたと考えられる (図7)。ビーズ類は第1期ではほとんどが貝製であったが、第2期になると石製ビーズの数が大きく増加し、貝製ビーズから石製ビーズへの転換が進んだことも明らかになっている。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は地中海まで直線距離にして約480kmあり、この時期までのものとしては、海産貝類が内陸部まで運ばれている事例の中でも最長の部類に入る (Baysal 2013a: Table 3)。おそらく交易ネットワークを通じて入手したものであると考えられるが、そこには遠隔地の希少な資源を獲得しようとする、ティグリス川上流域側の社会からの強い働きかけがあったことが想定され、その社会のあり方とも深く関係していたと考えられる (三宅 2017)。貝種がかなり限定されていることは、距離の問題や様々な要因から篩にかけられ、厳選された結果とみることもでき、選ばれた貝種が伝統的に利用されてきた *T. gibbosula* であったことは興味深いところである。

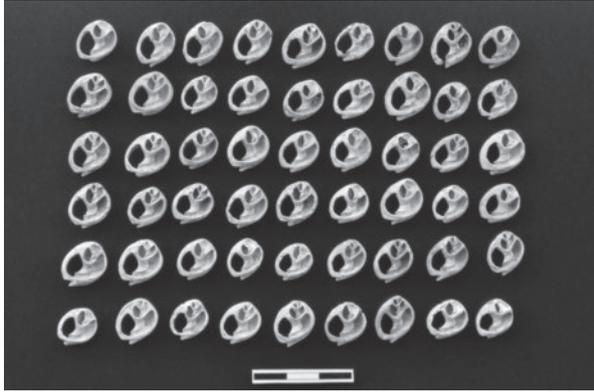


図2 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 250号墓出土 *T. gibbosula* 製ビーズ



図3 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 250号墓副葬品出土状況



図4 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 110号墓出土イモガイ類製装身具



図5 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 50号墓副葬品出土状況



図6 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 315号墓 *Theodoxus* sp. 製ビーズ出土状況



図7 ハッサンケイフ・ホユック遺跡 237号墓出土石製・*Theodoxus* sp. 製ビーズ

2) ユーフラテス川中流域

先土器新石器時代 A 期（これ以降 PPNA 期）に相当するムレイベト遺跡 I B–III B 期では、淡水産小型巻貝類が 66 点と最も多く、海産貝類としてはツノガイ類（9 点）、*T. gibbosula*（4 点）、*C. rustica*（4 点）、イモガイ類（1 点）が認められ、貝種は不明であるものの白玉も 13 点出土している（Maréchal and Alarashi 2008）。海産貝類の中でツノガイ類が半数を占めているが、出土総数自体あまり多くないため、どこまで有意なものであるのか判断するのは難しい面がある。いずれにしろ、貝種の構成という点では、アブ・フレイラ遺跡 1 期でみられたナトゥーフ後期の様相が PPNA 期においても継続していると評価することができる。

ティグリス川上流域から見た時に、ユーフラテス川中流域は地中海とのほぼ中間に位置し、地中海産貝類の流通ルート上にあったとみることもできる。ハッサンケイフ・ホユック遺跡ではツノガイ類と *C. rustica* は欠落しているものの、*T. gibbosula* とイモガイ類はユーフラテス川中流域でも認められる貝種である。これらの貝類はユーフラテス川中流域だけに特徴的なものではないものの、淡水産小型巻貝類も多く出土しているという状況は、ティグリス川上流域との関係を窺わせるものであると評価しておきたい。

ユーフラテス川中流域において、貝製装身具の様相に大きな変化がみられるようになるのは、アブ・フレイラ遺跡 2 期の先土器新石器時代 B 期（これ以降 PPNB 期）からである。淡水産小型巻貝は引き続き一定数認められるものの、50 点出土している海産貝類のうち、突如としてタカラガイ類（90%）が圧倒的多数を占めるようになる（Ridout-Sharpe 2015）。続旧石器時代から利用されてきた *T. gibbosula* と *C. rustica* はまったく検出されておらず、ツノガイ類もわずかに 1 点出土しているにすぎない。こうした変化がアブ・フレイラ遺跡だけにみられる特異な状況ではないことは、テル・ハルラ（Tell Halula）遺跡の資料からも窺い知ることができる（Alarashi et al. 2018）。この遺跡からは PPNB 中期から後期の層を通じて、タカラガイ類のビーズが 422 点出土し、そのうちの 314 点は墓の副葬品として出土した。タカラガイ類は 3 種確認されているが、そのうち紅海産である *Erosaria turdus*（76%）と *Erosaria nebrites*（12%）が多数を占め、距離的に近い地中海産の *Luria lurida*（7%）の方がむしろ少ないという状況にある。テル・ハルラ遺跡から紅海までは直線距離にして 800 km 以上もあるが、あえて距離的に遠い紅海産のタカラガイ類の方をより積極的に入手しようとしていたことになる。

タカラガイ類以外の貝製装身具についてはまだ分析

の途上ということであるが、もしアブ・フレイラ遺跡と同様の状況であるとしたならば、*T. gibbosula* と *C. rustica* はこの時期にタカラガイ類に置き換えられたということになる。特に、*T. gibbosula* とタカラガイ類製のビーズは、腹面（殻口）側の白色部分が強調される形で製作されている点で共通しており、これらの貝類が選択された基準が「光沢のある白色」にあった可能性も考えることができる。また、こうした変化は貝種の選択だけでなく、資源の供給元や流通ルートも含む構造的な変化であったとみることができ、中期旧石器時代にはじまった海産貝類の利用の歴史における最大の画期であると言えるかもしれない。

3) 南レヴァント

ヨルダン渓谷西部に位置する PPNA 期の集落遺跡ネティヴ・ハグドウド（Netiv Hagdud）からは、99 点の海産貝類が出土している（Bar-Yosef Mayer 1997a）。ツノガイ類（65%）が多数を占めており、ほかには *T. gibbosula*（12%）、*Glycymeris* sp.（10%）、タカラガイ類（5%）などが認められる。PPNA 期の遺跡ではほかに良好な資料はあまり知られておらず、比較検討するのは難しい状況にあるが、サリビヤ（Salibiya）IX 遺跡などでもツノガイ類が卓越している状況は確認されている（Bar-Yosef Mayer 1997a: 191）。ナトゥーフ期ほどではないにしろ、ツノガイ類の割合は依然として高く、貝種の構成にも大きな変化は認められないことから、基本的にナトゥーフ期にみられた様相が継続していると評価することができる。

後続する PPNB 期になると、こうした様相に変化が認められるようになる。ツノガイ類が大きく減少しほとんど利用されなくなり、それに代わって二枚貝が中心となる。クファル・ハホレシュ（Kfar HaHoresh）遺跡からは 1200 点以上の貝類が出土しているが、ツノガイ類はわずか 1 点しか確認されておらず、全体の約 75% をザルガイ類（Cardiidae: 約 50%）と *Glycymeris* sp.（約 25%）の 2 種の二枚貝が構成している（Bar-Yosef Mayer 2005）。これら以外には、地中海産の別の二枚貝、*C. rustica*、*T. gibbosula*、イモガイ類などが認められ、タカラガイ類を含む紅海産の貝も何種か出土している。これとよく似た状況はイフターヘル（Yiftah'el）遺跡でも認められ、ザルガイ類と *Glycymeris* sp. が中心となっていて、ツノガイ類は 1 点確認されているのみである（Bar-Yosef Mayer and Heller 1987）。ナトゥーフ期を頂点とする「ツノガイの時代」は、PPNB 期には終焉を迎えたと評価することができそうである。このほか、ナハル・ヘマル（Nahal Hemar）洞窟でも、ザルガイ類と *Glycymeris* sp. が 60% ほどを占めて

おり (Mienis 1988)、地中海に比較的近い地域ではこうしたあり方が一般的であったと考えられる。ユーフラテス川中流域とは卓越する貝種が異なっているものの、PPNB 期に貝製装身具のあり方が大きく変化するという点では共通していると言える。

ヨルダン南部の、紅海へ 35 km ほどの位置にあるアイン・アブ・ヌハイラ (Ayn Abū Nukhayla) 遺跡では、PPNB 中期の層から 1303 点の海産貝類が出土し、そのうちの 46.2%には加工の痕跡が認められた (Spatz et al. 2014)。未加工の完形の貝殻も多いため、遺跡においてビーズへの加工もおこなわれていたと考えられている。イモガイ類 (34%)、アマオブネガイ科の *Nerita* sp. (20%)、ツノガイ類 (10%)、タカラガイ類 (8%) の 4 種が主要な貝種となっており、遺跡の位置からみて当然のことかもしれないが、紅海産の貝類が圧倒的多数を占めている。地中海産の貝類も出土しているものの、*C. rustica*、*T. gibbosula* とタカラガイ類 (*Cypraea spurca*) に限られ、全体の 3.5%を占めるにすぎない。ツノガイ類が 10%ほど出土しているが、これらは紅海産のものである。

テル・ハルレーラ遺跡のように、ユーフラテス川中流域において紅海産のタカラガイ類が多数出土していることを考えると、紅海沿岸の遺跡は当然その供給元として注目されることになる。アイン・アブ・ヌハイラ遺跡の場合、タカラガイ類も一定の割合で出土しているとはいえ、むしろイモガイ類の方が一般的であり、同様の状況はシナイ半島南部の遺跡でも認められる (Bar-Yosef Mayer 1997b)。これは、紅海沿岸の遺跡でよく利用されていた貝が必ずしもそのまま内陸部に運ばれていたわけではなく、消費地側の価値観や文化的嗜好などに基づいた選択がおこなわれていたことを示していると考えられる。南レヴァントにおける PPNB 期の貝の素材や貝製品の流通については、基本的に遺跡から遺跡へと順次運ばれていく互酬連鎖交換的なパターンが認められるとの指摘があるが (Spatz 2017)、それを超えた遠隔地への流通についてはそうしたメカニズムだけでは説明がつかない面があることも確かであり、別の営力が働いていた可能性を積極的に検討すべきである¹²⁾。

4) 中央アナトリア

上述したプナルバシュ遺跡では、続旧石器時代の層位だけでなく、前 9 千年紀後半の先土器新石器時代の層も確認されている。貝製装身具も 30 点出土しており、*T. gibbosula* が 17 点と最も多く、ほかにツノガイ類 (6 点) と *C. rustica* (5 点) も認められる (Baysal 2013a)。続旧石器時代にはツノガイ類が主体的であったが、先土器新石器時代になると *T.*

gibbosula が中心となると評価することもできる。しかし、出土点数自体限定的なものであり、すでに指摘したように、データとしてどこまで有意なものであるのか注意する必要がある。*T. gibbosula* 製のビーズでは続旧石器時代のものより穿孔が大きくなる傾向が認められ、ツノガイ製のビーズでは短く分割されているものの割合が多くなっていることが指摘されている。

プナルバシュ遺跡と同じくコンヤ平原に位置するボンジュックル・ホユック (Boncuklu Höyük) 遺跡は、前 9 千年紀後半から前 8 千年紀前半にかけて居住された遺跡で、2010 年の調査までに表面採集品を含め 46 点の貝製ビーズが出土している (Baysal 2013b)。ここでも *T. gibbosula* 製のビーズが 26 点と最も多く、ほかにアマオブネガイ科の *Nerita* sp. (11 点)、*C. rustica* (5 点)、ツノガイ類 (4 点) が出土している。ちなみに、これらの貝製ビーズの 66%が先土器新石器時代の層位から出土したことが確認できるものであり、そのうちの 6 点は埋葬に伴っていたが、ほとんどが 1 点のみ単独で出土したものである。

これらの中央アナトリアの先土器新石器時代の資料は、数量的にも限定的なもので、良好なデータとは言えないかもしれないが、そこからは少なくともユーフラテス川中流域や南レヴァントでみられたような、貝製装身具の貝種の構成に大きな変化がおこったような様子は確認することができない。後続するチャタルホユック (Çatalhöyük) 遺跡においても *T. gibbosula* が引き続き利用されているところを見ると (Bar-Yosef Mayer 2013)、現状では中央アナトリアにおいては先土器新石器時代になっても続旧石器時代からの様相が継続していたと評価することができる。

5. 考察

西アジア先史時代における貝製装身具の様相をその出現期からある程度の期間、通時的に辿ることによって明らかになったことがいくつかある。まず指摘できるのは、貝製装身具の素材として特定の種類の貝が、長期にわたって継続的に利用されてきたことである。中期旧石器時代に最古の貝製装身具の素材とされたのは *T. gibbosula* と *Glycymeris* sp. であったが、*T. gibbosula* は後期旧石器時代初期には貝製装身具の中で 85-95%を占める事例があるなど、その後も主要な素材として利用されていく。*Glycymeris* sp. については地域的な偏りが認められ、北レヴァントでは利用されることがほとんどないが、レバノン以南の遺跡では後期旧石器時代において一定の割合を占める形となっている。また、今のところ中期旧石器時代にまで

遡る事例は知られていないものの、*C. rustica* も後期旧石器時代初期にはすでに利用されるようになり、アフマル期になると25%以上を占める遺跡もみられるようになる。これら3つの貝種は遺跡や地域によっては一部が欠落している場合もあり、常にセットを形成しているわけではないが、後期旧石器時代から先土器新石器時代まで貝製装身具の主要な素材となっている遺跡が認められ、中期旧石器時代にまで遡る長い伝統をもつ西アジア先史時代の貝製装身具において、特に好んで利用されてきた代表的な貝種であると評価することができる。

そうした中であって、ツノガイ類を素材とする貝製装身具はやや特異なあり方を示している。ツノガイ類は上記の3つの貝種からは遅れて後期旧石器時代のレヴァント・オーリニャック期から利用されるようになるが、続旧石器時代になると貝製装身具の中で主要な位置を占めるようになり、特にナトゥーフ期においては多くの遺跡で貝製装身具の70-90%を占めるという特徴的な状況がみられるようになる。また、ツノガイ類のビーズが墓の副葬品として出土する事例が認められるようになることも、それまでの貝製装身具にはみられなかった大きな変化であるといえる。

利用されたツノガイ類には複数の種が含まれているとはいえ、外観が類似する特定の貝類に大きく集中するという現象は、単なる好みや流行として片づけられるようなレベルのものではなく、その背後にある社会のあり方と深く関係している可能性が高いと思われる。こうしたツノガイ類への集中は「ナトゥーフ文化」の核地域とされる南レヴァントにおいて顕著に認められるのに対し、同様に「ナトゥーフ文化」の分布域に含められるシリア南部やユーフラテス川中流域では、ツノガイ類の割合は概して低い傾向にある。後者の地域においては、ツノガイ類のビーズは *T. gibbosula* や *C. rustica* などとともに、あくまでも貝製装身具のひとつであるにすぎず、実体としては同じモノであったとしても、それがもっていた社会的な意味は南レヴァントのものとは大きく異なっていた可能性がある。

南レヴァントのナトゥーフ期の遺跡における特異なまでのツノガイ類への集中は、貝製装身具が単なる個人のための身体装飾用の道具ではなくなり、特定の集団や社会組織などと深く関係する、それまでとは質的に異なる新たな象徴的な意味が付与されるようになったことと関係していると考えられる。その実態を探るための手がかりは決して多いとはいえないが、いくつかの可能性を指摘することはできると思われる。まず、南レヴァントという比較的限定された範囲において、ツノガイ類ビーズが高い割合で出土する遺跡が認められるということからは、それがナトゥーフ

期の社会、あるいは「ナトゥーフ文化」の核地域の社会にとって特別な意味をもつ、ある種の集団標章的な役割を担うような存在であった可能性を考慮することができる。それを身に着けることにより、その個人が特定の集団に帰属していることを表示するとともに、その行為を繰り返すことによって集団への帰属意識を高めていくという効果も期待できる。もしツノガイ製ビーズがそのような性格をもつものであったとしたならば、「ナトゥーフ文化」の核地域の社会は、ツノガイ類のビーズによって象徴されるアイデンティティを共有する集団であったと解釈できるようになり、「ナトゥーフ文化」の地理的領域もこれまでよりも限定して考える必要が出てくることになる。

次に、ツノガイ類のビーズを中心とする装身具が副葬品として墓に納められ、しかもそれがごく限られた特定の墓にしか認められないという事実からは、これらの装身具が集団内での位階や出自などを表象する機能をはたしていた可能性も考慮することができる。これだけを論拠として、ナトゥーフ期の社会は階層化を発達させていたと評価するのは早計であるかもしれないが、リネージュやクランのような社会組織の形成やヘテラルキー的な集団の分節化を含め、ある程度社会の複雑化を発達させていたと考えることは許されるのではないかと思われる。また、割合は少ないながらもほかの貝製装身具が存在する中で、副葬品とされたのがツノガイ類のビーズに限られるということは、それがナトゥーフ期の社会にとって特別な意味をもつ存在であったことを補強する材料にもなる。豊富な貝製装身具を伴う埋葬の事例はナトゥーフ後期になると確認できなくなるが、ツノガイ類のビーズ自体は依然として高い割合を保っており、ツノガイ類をめぐるシンボリズムは継承されていたと考えられる。

もうひとつ、ナトゥーフ期には貝製装身具に加えて骨製装身具や石製ビーズなどもみられるようになり (Bar-Yosef Mayer and Porat 2008 など)、装身具の種類や量が増加することにも注目したい。谷口康浩は縄文時代における装身具の発達について、儀礼祭祀の発達や社会の複雑化と密接に関係しており、それに促された特殊生産と長距離交易の発達がその背景にはあると指摘している (谷口 2021)。「儀式祭祀に参加する者は正装し威儀を正すのが通例である」とし、正装に欠かせない要素として、あるいはそれを身に着ける人物の威信を高めるために、希少で精巧な作りの装身具が希求されたとみている。こうした視点は西アジアの先史時代の装身具や儀器の発達について考える際にも、おおいに参考になると思われる。実際、ナトゥーフ期における儀礼祭祀の証拠は近年蓄積されつつあり (Munro and Grosman 2010; Grosman and Munro 2016)、集落内に儀礼祭祀に関係する公共建造物が存

在していた可能性も指摘されるようになってきている (Haklay and Gopher 2015)。貝製装身具についても、こうした視点からの検討は必要になると思われる。

いずれにしろ、南レヴァントのナトゥーフ期におけるツノガイ類のビーズは、象徴的意味の付与された特別な器物としての性格を有していた可能性が高いと考えられ、それまでの貝製装身具とは質的に異なった存在となっていたと思われる。今のところ、そうした変化が顕在化するのにはナトゥーフ期になってからであるといえ、そのような器物の創出、あるいは既存の器物に新たな意味が付与されるようになった背景には、社会の複雑性を発達させたナトゥーフ期の社会のあり方が深く関係していると考えられる。

貝製装身具についてももうひとつ確認しておかなくてはならないのは、長距離交易ネットワークの形成との関係である。海産貝類の場合、資源の獲得地点まで特定することは難しいとしても、内陸までどの程度の距離を運ばれたのか、ある程度推測することは可能である。すでに後期旧石器時代初期において 185 km ほど内陸に海産貝類が運ばれている事例が報告されているほか (Kadowaki et al. 2019)、レヴァント・オーリニャック期には社会的ネットワークに基づいて貝類が入手されていた可能性も考えることができるとの指摘もある (Bar-Yosef Mayer 2019)。しかし、移動性の高い集団の場合には、資源を獲得するために自ら海岸部に出向いていた可能性も排除することができないという事情もある。一方、定住化が進んだナトゥーフ期の社会のような場合には、遺跡から出土する遠隔地の物資については、基本的に交易による入手を想定することができるようになる。実際、南レヴァントにおいては続旧石器時代中期頃からアナトリア産の黒曜石が出土するようになり、ナトゥーフ期になるとチャートや緑色などの美しい色をした石材もみられるようになる (Delage 2018)。貝製装身具の素材とされた海産貝類も非在地性の資源として扱われることがあるが、そもそもナトゥーフ期の遺跡が分布する範囲は地中海や紅海から比較的近いこともあり、評価が難しい面がある。

そうした中であって PPNA 期の事例にはなるものの、ハッサンケイフ・ホユック遺跡のように、ティグリス川上流域の定住度の高い集落から出土している地中海産の貝類は、長距離交易ネットワークを通じて入手された可能性が高いとみることができる。地中海からは直線距離にして約 480 km あり、この時期までのものとしては最も遠く内陸部まで運ばれた海産貝類の事例となっている。先史時代における物資の流通には、当然のことながらきわめて大きなコストがかかるものであり、単に「物資の流通が盛んになった」といった漠然とした評価で片付けられるようなものでは

ない。その背後には、遠隔地の希少な物資の入手を希求する強い力が働いていたと考えるべきである。実際、ティグリス川上流域の PPNA 期の社会では、公共建造物の存在や石製容器・石製装身具に代表される特殊生産の発達認められ、儀礼祭祀の発達や社会の複雑化が進展していた様子もうかがわれる (三宅 2020)。そうした社会の中において、それを保有することで威信を高めることのできる器物が求められ、そのひとつが貝製装身具であったと考えることができるだろう。ハッサンケイフ・ホユック遺跡の場合、選ばれたのは中期旧石器時代以来利用されてきた *T. gibbosula* であったが、この時期には象徴的な意味の付与された、威信財に近い性格をもつものとなっていたと考えられる。ナトゥーフ期におけるツノガイ類のビーズだけでなく、新石器時代に移行する前後の時期には、ほかの貝製装身具にも特別な意味が付与されるようになったのではないかと考えることができる。

西アジアにおける先史時代の貝製装身具については、*T. gibbosula*、*Glycymeris* sp.、*C. rustica* が主要な素材となってきたことはすでに指摘した。こうしたあり方に大きな変化がみられるようになるのは、ツノガイ類への集中がみられるようになるナトゥーフ期のほかに、PPNB 中期ごろにも認められる。ユーフラテス川中流域では *T. gibbosula* と *C. rustica* に代わって紅海産を中心とするタカラガイ類が、南レヴァントの地中海に近い地域ではツノガイ類に代わって海産の二枚貝が卓越するようになる。もちろん地域的な差異も認められ、中央アナトリアのように旧来のあり方がこの時期になっても継承されているようにみえる地域もあるが、ユーフラテス川中流域や南レヴァントで認められる変化は、旧石器時代以来の長い伝統的なあり方から逸脱した、貝製装身具の歴史におけるひとつの画期として捉えることができる。

南レヴァントでは PPNA 期まではツノガイ類のビーズがかなりの割合を占めていたが、PPNB 期になると大きく減少し、ほとんど出土しなくなってしまう。これを資源の枯渇などの環境的要因から説明することも可能かもしれないが、この時期の貝製装身具の性格を考えると、むしろ文化的要因による説明の方が説得力をもつように思われる。ツノガイ類のビーズに象徴的意味が付与されていたとしたならば、単なる物質としての存在以上に、その社会のイデオロギーや儀礼の体系なども不可分な関係にあったと考えることができる。ある程度の期間はうまく機能していたとしても、現実の社会に変化がおきると、これらの体系との齟齬や乖離が生じることになる。ツノガイ類のビーズが象徴していたものが意味を失い、社会的機能を果たせなくなった時、それに代わる新たなシンボルが求められるようになることは十分想像することができる。

る。それが南レヴァントでは海産二枚貝であり、ユーフラテス川中流域の場合はタカラガイ類であったと考えれば、これらの貝種の転換もうまく説明がつくようになる。さらに、紅海産のタカラガイ類はユーフラテス川中流域から 800 km もの距離を運ばれており、長距離交易ネットワークもこの時期にはさらにそのスケールを拡大させたことが理解される。

註

- 1) 近年では、ヨーロッパ各地でネアンデルタール人に関係すると考えられる時期の遺跡から貝製装身具、顔料、猛禽類の鉤爪、鳥の羽毛の存在が報告されるようになり、現生人類とネアンデルタール人との認知能力の違いは、これまで考えられてきたよりも小さかったのではないかとする意見が有力になりつつあるようである (Roebroeks and Soressi 2016)。
- 2) 貝類の名称については、本来であれば和名で記載すべきかもしれないが、特に日本列島周辺には生息していない貝の場合、必ずしも全てに和名が当てられているとは限らず、また当てられていたとしてもその名称が馴染みのないものである場合も多い。したがって本稿では、基本的に特に和名の方が通りのよいものを除き、学名をそのまま用いることにする。
また、*Tritia gibbosula* はこれまで *Nassarius gibbosulus* とされてきた貝であるが、遺伝子の解析によって *Tritia* 属に分類することが提唱されており (Galindo et al. 2016)、考古学の分野でもその名称を採用するケースが増えつつあるため、本稿でもそれに従うことにする。かつては *Arcularia* とされていたこともあったことからわかるように (Reese 1991)、分類体系の変更によって貝の名称が変わることはそれほど珍しいことではないようである。
- 3) 貝には人為的な穿孔以外にも、肉食性の貝類などによって捕食された場合や死貝が波に洗われて摩擦することによって孔があくことがある。地中海沿岸での打ち上げ個体の調査によると、現生の *T. gibbosula* の場合、孔のあいている個体が 3.5 % 程度認められるとのデータがある (Vanhaeren et al. 2006: 1787)。
- 4) 2009 年の報告では *Glycymeris insubrica* とされていたが (Bar-Yosef Mayer et al. 2009)、その後 *Glycymeris nummaria* と訂正された (Bar-Yosef Mayer 2015: 79)。なお、さらに古い時期 (24-16 万年前) のホモ・サピエンスの骨が発見されたミスリヤ (Misliya) 洞窟でも、穿孔や加工の痕跡こそ認められないものの、*G. nummaria* が出土している (Bar-Yosef Mayer et al. 2020)。貝殻の利用自体はスファール洞窟 B 層よりも年代的にさらに遡るとみられるが、ここでもホモ・サピエンスとの関係が窺われる。
- 5) ウェド・ジェッパーナ遺跡からは *T. gibbosula* のピーズが 1 点確認されているだけである (Vanhaeren et al. 2006)。アテル期の遺物しか発見されていないことから、その時期に帰属するとされているものの、地中海からの距離が遠いことや貝殻に見られる孔の位置がやや特異であり、その位置づけをめぐっては議論もある。
- 6) ウチュアウズル I 洞窟の E-C 層については、アフマル期前期 (early Ahmarian)、あるいは先アフマル期 (pre-Ahmarian) と呼称されることもある (Stiner 2014)。
- 7) 当初は上層のナトゥーフ期の層からの混入とみられていたが、後期旧石器時代にツノガイが出土する事例が増えてき

たことを受け、本来の出土層位である後期旧石器時代に帰属するとみてよいのではないかと指摘がある (Bar-Yosef Mayer 2019: 111)。

- 8) 縄文時代においてもツノガイ類は装身具の素材として利用されており、当時の現生の貝に加え、化石貝も利用されていた可能性が指摘されている (忍澤 2011: 374)。縄文時代早期・前期では、オハロ II 遺跡の事例のように、ツノガイ類を数 mm 程度に短く「輪切り」にした小型のものが多数を占めるのに対し、中期以降になると貝殻の両端部を切断・加工しただけの長い「管状」のものへと変化する。前者が化石貝を、後者が当時の現生の貝を素材としていた可能性が指摘されており、現生の貝は質的に短く切断するような加工には適していないためではないかとされている。
- 9) タカラガイ類の学名については、属名として *Erosaria* のほかにも *Cypraea* や *Naria* などが与えられてきたが、本稿では原則として各報告で用いられている表記に従うことにする。
- 10) 特に豊富な副葬品を伴っていた事例を集計した数であり、数点程度の副葬品のみみられる例も含めると、その割合はもう少し高くなる (Wright 1978)。
- 11) アブ・フレイラ遺跡 I 期の層からは淡水産巻貝類が 36 点出土しており、アマオブネガイ科の *Neritina cincitella* が 33 点と最も多い (Ridout-Sharpe 2015)。形態も大きさも *Theodoxus* sp. とよく似ている貝である。
- 12) これについては、縄文時代の硬玉製 (ヒスイ製) 大珠のあり方が参考になる部分もある。ヒスイの産地は糸魚川周辺であるが、大珠の分布は産地から同心円状に広がっているわけではなく、むしろ産地から 100 km 以上離れた地域に濃密に分布し、しかもそうした地域に大型の優品が多いことが指摘されている (栗島 2019)。社会的に価値のある物財はより遠くへと運ばれ、あるいは原産地から離れるほど社会的価値が増したのではないかと考えられており、距離などの物理的要因だけが流通のあり方を規定するわけではないこと示す好例となっている。

参考文献

- Alarashi, H., A. Ortiz and M. Molist 2018 Sea Shells on the Riverside: Cowrie Ornaments from the PPNB Site of Tell Halula (Euphrates, Northern Syria). *Quaternary International* 490: 98-112.
- Albrecht, G., B. Albrecht, H. Berke, D. Burger, J. Moser, W. Rähle, W. Schoch, G. Storch, H. P. Uerpmann and B. Urban 1992 Late Pleistocene and Early Holocene Finds from Öküzini: A Contribution to the Settlement History of the Bay of Antalya, Turkey. *Paléorient* 18(2): 123-141.
- Amr, Z. S. and M. Abu Baker 2004 Freshwater Snails of Jordan. *Denisia* 14: 221-227.
- Amr, Z., H. Nasarat and E. Neubert 2014 Notes on the Current and Past Freshwater Snail Fauna of Jordan. *Jordan Journal of Natural History* 1: 83-115.
- Bar-Yosef, O. 2002 Natufian: A Complex Society of Foragers. In B. Fitzhugh and J. Habu (eds.), *Beyond Foraging and Collecting: Evolutionary Change in Hunter-Gatherer Settlement Systems*, 91-148. New York, Kluwer Academic/Plenum.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 1997a Miscellaneous Finds: The Marine Shells from Netiv Hagdud. In O. Bar-Yosef and A. Gopher (eds.), *An Early Village in the Jordan Valley Part I: The Archaeology of Netiv Hagdud*, 189-192. Cambridge MA, Peabody Museum of

- Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 1997b Neolithic Shell Beads Production in Sinai. *Journal of Archaeological Science* 24: 97-111.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2002 The Use of Mollusc Shells by Fisher-hunter-gatherers at Ohalo II. In D. Nadel (ed.), *Ohalo II: A 23,000-year-old Fisher-hunter-gatherers' Camp on the Shore of the Sea of Galilee*, 39-41. Haifa, Reuben and Edith Hecht Museum, University of Haifa.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2005 The Exploitation of Shells as Beads in the Palaeolithic and Neolithic of the Levant. *Paléorient* 31(1): 176-185.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2010 The Role of Aquatic Resources in the Natufian Culture. *Eurasian Prehistory* 7(1): 29-43.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2013 Mollusc Exploitation at Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Humans and Landscapes of Çatalhöyük: Reports from the 2000-2008 Seasons. Çatalhöyük Research Project, vol. 8*, 329-338. Los Angeles, Cotsen Institute of Archaeology Press.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2015 *Nassarius* Shells: Preferred Beads of the Palaeolithic. *Quaternary International* 390: 79-84.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2019 Upper Paleolithic Explorers: The Geographic Sources of Shell Beads in Early Upper Paleolithic Assemblages in Israel. *PaleoAnthropology* 2019: 105-115.
- Bar-Yosef Mayer, D. E., I. Groman-Yaroslavski, O. Bar-Yosef, I. Hershkovitz, A. Kampen-Hasday, B. Vandermeersch, Y. Zaidner and M. Weinstein-Evron 2020 On Holes and Strings: Earliest Displays of Human Adornment in the Middle Palaeolithic. *PLoS ONE* 15(7); e0234924. doi: 10.1371/journal.pone.0234924.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. and J. Heller 1987 Mollusca from Yiftah'el, Lower Galilee, Israel. *Paléorient* 13(1): 131-135.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. and N. Porat 2008 Green Stone Beads at the Dawn of Agriculture. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 105(25): 8548-8551.
- Bar-Yosef Mayer, D. E., B. Vandermeersch and O. Bar-Yosef 2009 Shells and Ochre in Middle Paleolithic Qafzeh Cave, Israel: Indications for Modern Behavior. *Journal of Human Evolution* 56: 307-314.
- Baysal, E. 2013a Epipalaeolithic Marine Shell Beads at Pınarbaşı: Central Anatolia from an Eastern Mediterranean Perspective. *Anatolica* 39: 261-276.
- Baysal, E. 2013b A Tale of Two Assemblages: Early Neolithic Manufacture and Use of Beads in the Konya Plain. *Anatolian Studies* 63: 1-15.
- Baysal, E. L. 2016 Anadolu ve Levant Epi-Paleolitikü ışığında Direkli Mağarası kişisel süs eşyaları. *Anadolu* 42: 137-154.
- Belfer-Cohen, A. 1995 Rethinking Social Stratification in the Natufian Culture: The Evidence from Burials. In S. Campbell and A. Green (eds.), *The Archaeology of Death in the Ancient Near East*, 9-16. Oxford, Oxbow Books.
- Belfer-Cohen, A. and O. Bar-Yosef 1981 The Aurignacian at Hayonim Cave. *Paléorient* 7: 19-42.
- Bosch, M. D., F. P. Wesselingh and M. A. Mannino 2015 The Ksâr 'Akil (Lebanon) Mollusc Assemblage: Zooarchaeological and Taphonomic Investigations. *Quaternary International* 390: 85-101.
- Bouzouggar, A., N. Barton, M. Vanhaeren, F. d'Errico, S. Collcutt, T. Higham, E. Hodge, S. Parfitt, E. Rhodes, J.-L. Schwenninger, C. Stringer, E. Turner, S. Ward, A. Moutmir and A. Stambouli 2007 82,000-year-old Shell Beads from North Africa and Implications for the Origins of Modern Human Behavior. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 104(24): 9964-9969.
- Byrd, B. F. and C. M. Monahan 1995 Death, Mortuary Ritual, and Natufian Social Structure. *Journal of Anthropological Archaeology* 14: 251-287.
- Delage, C. 2018 Revisiting Rolling Stones: The Procurement of Non-local Goods in the Epipaleolithic of the Near East. *Quaternary International* 464: 159-172.
- d'Errico, F., C. Henshilwood, M. Vanhaeren and K. Van Niekerk 2005 *Nassarius kraussianus* Shell Beads from Blombos Cave: Evidence for Symbolic Behaviour in the Middle Stone Age. *Journal of Human Evolution* 48(1): 3-24.
- d'Errico, F., M. Vanhaeren, N. Bartond, A. Bouzouggar, H. Mienisf, D. Richter, J.-J. Hubling, S. P. McPherron and P. Lozoueth 2009 Additional Evidence on the Use of Personal Ornaments in the Middle Paleolithic of North Africa. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106(38): 16051-16056.
- Edwards, P. C. (ed.) 2013 *Wadi Hammeh 27, an Early Natufian Settlement at Pella in Jordan*. Brill, Leiden.
- Galindo, L. A., N. Puillandre, J. Utge, P. Lozouet and P. Bouchet 2016 The Phylogeny and Systematics of the Nassariidae Revisited (Gastropoda, Buccinoidea). *Molecular Phylogenetics and Evolution* 99: 337-353.
- Garrod, D. A. E. 1936/1937 Notes on Some Decorated Skeletons from the Mesolithic of Palestine. *The Annual of the British Schools at Athens* 37: 123-127.
- Garrod, D. A. and D. M. A. Bates 1937 *The Stone Age of Mount Carmel: Excavations at the Wady el-Mughara, Vol. 1*. Oxford, Clarendon Press.
- Goring-Morris, N. 1995 The Early Natufian Occupation at El Wad, Mt. Carmel Reconsidered. In M. Otte (ed.), *Nature et Culture*, 415-425. Liège, Études et Recherches Archéologiques de l'Université de Liège.
- Grosman, L. and N. D. Munro 2016 A Natufian Ritual Event. *Current Anthropology* 57(3): 311-331.
- Grosman, L., N. D. Munro, I. Abadi, E. Boaretto, D. Shahmam, A. Belfer-Cohen and O. Bar-Yosef 2016 Nahal Ein Gev II: A Late Natufian Community at the Sea of Galilee. *PLoS ONE* 11(1); e0146647. doi: 10.1371/journal.pone.0146647.
- Grün, R., C. Stringer, F. McDermott, R. Nathan, N. Porat, S. Robertson, L. Taylor, G. Mortimer, S. Eggins and M. McCulloch 2005 U-series and ESR Analyses of Bones and Teeth Relating to the Human Burials from Skhul. *Journal of Human Evolution* 49(3): 316-334.
- Haklay, G. and A. Gopher 2015 A New Look at Shelter 131/51 in the Natufian Site of Eynan (Ain-Mallaha), Israel. *PLoS ONE* 10(7); e0130121. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0130121>.

- Henry, D. O. 1989 *From Foraging to Agriculture: The Levant at the End of the Ice Age*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Henshilwood, C. S., F. d'Errico, R. Yates, Z. Jacobs, C. Tribolo, G. A. T. Duller, N. Mercier, J. Sealy, H. Valladas, I. Watts and A. G. Wintle 2002 Emergence of Modern Human Behavior: Middle Stone Age Engravings from South Africa. *Science* 295(5558): 1278-1280.
- Hovers, E., L. K. Horwitz, D. E. Bar-Yosef and C. Cope-Miyashiro 1988 The Site of Urkan-E-Rub IIa: A Case Study of Subsistence and Mobility Patterns in the Kebaran Period in the Lower Jordan Valley. *Journal of Israel Prehistoric Society* 21: 20-48.
- Hublin, J.-J., A. Ben-Ncer, S. E. Bailey, S. E. Freidline, S. Neubauer, M. M. Skinner, I. Bergmann, A. Le Cabec, S. Benazzi, K. Harvati and P. Gunz 2017 New Fossils from Jebel Irhoud, Morocco and the Pan-African Origin of *Homo sapiens*. *Nature* 546(7657): 289-292.
- Janetski, C. J. 2005 Shifts in Epipaleolithic Marine Shell Exploitation at Wadi Mataha, Southern Jordan. In D. E. Bar-Yosef Mayer (ed.), *Archaeomalacology: Molluscs in Former Environments of Human Behaviour*, 132-147. Proceedings of the 9th ICAZ Conference, Durham 2002. Oxford, Oxbow Books.
- Kadowaki, S., T. Kurozumi and D. O. Henry 2019 Marine Shells from Tor Fawaz, Southern Jordan, and Their Implications for Behavioral Changes from the Middle to Upper Palaeolithic in the Levant. In Y. Nishiaki and O. Jöris (eds.), *Learning among Neanderthals and Palaeolithic Modern Humans: Archaeological Evidence*, 161-178. Singapore, Springer Nature Singapore Pte Ltd..
- Kandel, A. W., Bretzke, K. and N. J. Conard 2018 Epipaleolithic Shell Beads from Damascus Province, Syria. *Quaternary International* 464: 126-140.
- Kuhn, S. L., M. C. Stiner, D. S. Reese and E. Güreç 2001 Ornaments of the Earliest Upper Paleolithic: New Insights from the Levant. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 98 (13): 7641-7646.
- Kurzawska, A., D. E. Bar-Yosef Mayer and H. K. Mienis 2013 Scaphopod Shells in the Natufian Culture. In O. Bar-Yosef and F. R. Valla (eds.), *Natufian Foragers in the Levant: Terminal Pleistocene Social Changes in Western Asia*, 611-621. Ann Arbor, International Monographs in Prehistory.
- Maher, L. A., D. A. Macdonald, A. Allentuck, L. Martin, A. Spyrou and M. D. Jones 2016 Occupying Wide Open Space? Late Pleistocene Hunter-gatherer Activities in the Eastern Levant. *Quaternary International* 396: 79-94.
- Maher, L. A., T. Richter and J. T. Stock 2012 The Pre-Natufian Epipaleolithic: Long-term Behavioral Trends in the Levant. *Evolutionary Anthropology* 21: 69-81.
- Maréchal, C. and H. Alarashi 2008 Les éléments de parure de Mureybet. In J. J. Ibáñez (ed.), *Le Site Néolithique de Tell Mureybet (Syrie de Nord)*, 575-619. Oxford, Archaeopress.
- McBrearty, S. and A. S. Brooks 2000 The Revolution That Wasn't: A New Interpretation of the Origin of Modern Human Behavior. *Journal of Human Evolution* 39(5): 453-563.
- Mercier, N., H. Valladas, O. Bar-Yosef, B. Vandermeersch, C. Stringer and J.-L. Joron 1993 Thermoluminescence Date for the Mousterian Burial Site of Es-Skhul, Mt. Carmel. *Journal of Archaeological Science* 22: 495-509.
- Mienis, H. 1988 Nahal Hemar Cave: The Marine Molluscs. *'Atiqot (English Series)* 18: 47-49.
- Munro, N. D. and L. Grosman 2010 Early Evidence (ca. 12,000 BP) for Feasting at a Burial Cave in Israel. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 107(35): 15362-15366.
- Reese, D. S. 1991 Marine Shells in the Levant: Upper Palaeolithic, Epipaleolithic and Neolithic. In O. Bar-Yosef and F. R. Valla (eds.), *The Natufian Culture in the Levant*, 613-628. Ann Arbor, International Monographs in Prehistory.
- Richter, T., A. N. Garrard, S. Allock and L. A. Maher 2011 Interaction before Agriculture: Exchanging Material and Sharing Knowledge in the Final Pleistocene Levant. *Cambridge Archaeological Journal* 21(1): 95-114.
- Ridout-Sharpe, J. 2015 Changing Lifestyles in the Northern Levant: Late Epipaleolithic and Early Neolithic Shells from Tell Abu Hureyra. *Quaternary International* 390: 102-116.
- Roebroeks, W. and M. Soressi 2016 Neandertals Revised. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 113(23): 6372-6379.
- Szwarcz, H. P., R. Grün, B. Vandermeersch, O. Bar-Yosef, H. Valladas and E. Tchernov 1988 ESR Dates for the Hominid Burial Site of Qafzeh in Israel. *Journal of Human Evolution* 17: 733-737.
- Shaham, D. and A. Belfer-Cohen 2017 The Natufian Audio-visual Bone Pendants from Hayonim Cave. In D. E. Bar-Yosef Mayer, C. Bonsall and A. M. Choyke (eds.), *Not Just for Show: The Archaeology of Beads, Beadwork, and Personal Ornaments*, 95-102. Oxford, Oxbow Books.
- Shimelmitz, R., D. E. Friesem, J. L. Clark, I. Groman-Yaroslavski, L. Weissbrod, N. Porat and A. W. Kandel 2018 The Upper Paleolithic and Epipaleolithic of Sefunim Cave, Israel. *Quaternary International* 464: 106-125.
- Spatz, A. J. 2017 Ornamental Shell Beads as Markers of Exchange in the Pre-Pottery Neolithic B of the Southern Levant. In D. E. Bar-Yosef Mayer, C. Bonsall and A. M. Choyke (eds.), *Not Just for Show: The Archaeology of Beads, Beadwork, and Personal Ornaments*, 69-80. Oxford, Oxbow Books.
- Spatz, A. J., D. E. Bar-Yosef Mayer, A. Nowell and D. O. Henry 2014 Ornaments of Shell and Stone: Social and Economic Insights. In D. O. Henry and J. E. Beaver (eds.), *The Sands of Time: The Desert Neolithic Settlement at Ayn Abū Nukhayla*, 245-258. Berlin, ex Oriente.
- Steele, T., E. Álvarez-Fernández and E. Hallett-Desguez 2019 A Review of Shells as Personal Ornamentation during the African Middle Stone Age. *PaleoAnthropology* 2019: 24-51.
- Stiner, M. C. 2014 Finding a Common Bandwidth: Causes

- of Convergence and Diversity in Paleolithic Beads. *Biological Theory* 9: 51-64.
- Stiner, M. C., S. L. Kuhn and E. Güreç 2013 Early Upper Paleolithic Shell Beads at Üçağızlı Cave I (Turkey): Technology and the Socioeconomic Context of Ornament Life-histories. *Journal of Human Evolution* 64: 380-398.
- Valladas, H., J. L. Reyss, J. L. Joron, G. Valladas, O. Bar-Yosef and B. Vandermeersch 1988 Thermoluminescence Dating of Mousterian "Proto-Cro-Magnon" Remains from Israel and the Origin of Modern Man. *Nature* 331(6157): 614-616.
- Vanhaeren, M., F. d'Errico, C. Stringer, S. James, J. A. Todd and H. K. Mienis 2006 Middle Paleolithic Shell Beads in Israel and Algeria. *Science* 312(5781): 1785-1788.
- Wright, G. A. 1978 Social Differentiation in the Early Natufian. In C. L. Redman, M. J. Berman, E. V. Curtin, W. T. Longhorne, N. H. Versaggi and J. C. Wanser (eds.), *Social Archaeology: Beyond Subsistence and Dating*, 201-223. New York, Academic Press.
- 忍澤成視 2011『貝の考古学』同成社。
- 門脇誠二 2013「アフリカと西アジアの旧石器文化編年からみた現代人的行動の出現パターン」西秋良宏（編）『ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学からみた交替劇』21-37頁 六一書房。
- クライン、R. G.・エドガー、B. 2004『5万年前に人類に何が起きたか？ 意識のビッグバン』新書館。
- 栗島義明 2019「大珠の佩用とその社会的意義を探る」栗島義明（編）『身を飾る縄文人：副葬品から見た縄文社会』253-266頁 雄山閣。
- 谷口康浩 2021『石棒と土偶 儀礼と社会ドメスティケーション』雄山閣。
- 三宅 裕 2017「揺らぐ新石器革命論—農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会」『季刊考古学』第141号 33-36頁。
- 三宅 裕 2020「葬制からみる西アジア先土器新石器時代の社会—ハッサンケイフ・ホユック遺跡の事例から—」常木晃先生退職記念論文編集委員会（編）『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』3-18頁 六一書房。

